

氏名（本籍）	朝倉 雅史
学位の種類	博士（体育科学）
学位記番号	博乙第 2745 号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	体育教師の成長と学びに関する研究 —信念と経験の相互影響関係に着目して—

主査	筑波大学教授	博士（体育科学）	中込 四郎
副査	筑波大学教授		清水 紀宏
副査	筑波大学教授	教育学博士	菊 幸一
副査	筑波大学教授	博士（教育学）	浜田 博文

## 論文の内容の要旨

### （目的）

体育教師の成長・発達を促し、その質的保障を図ることは、学校体育の成果向上において極めて重要な経営課題である。本研究の目的は、体育教師の信念と学習経験との相互影響関係を多角的に分析することを通して、信念の構造と機能を明らかにし、それらの知見にもとづいて、体育教師が自らの信念を問い続けていくために有効な学習・研修環境のあり方を提示することである。

### （対象と方法）

本研究では、経営学における組織学習論を援用しつつ分析枠組を設定し、1)体育教師の学習経験・環境の実態把握、2)強い信念の教育実践への表出、3)体育教師の保有する信念の内実と変容の様相、4)信念の構造と機能の分析、5)信念形成・変容に及ぼす経験と教訓の抽出、6)信念を問い直す深い省察を促す学習環境、という 6 つの研究課題に関する実証研究及び考察を行った。データは、いずれも中学・高等学校保健体育教師を対象とした 3 種類の質問紙調査及び 2 種類の面接調査によって収集し、研究課題に応じて、記述統計学的分析、ライフヒストリー分析、探索的内容分析、多変量分析を適用した。

### （結果）

第 3 章では、体育教師をめぐる学習環境と学習経験の実態を把握するため、質問紙調査の結果に基づく分析を行い、授業観の変容経験、体育教師の学習経験、研修観について検討した。その結果、体育教師は教職経験年数にかかわらず、授業観の大幅な変容を経験する教師は少数であること、「内容の省察」に比して「前提の省察」は起こりにくいことが明らかとなった。また、体育教師の学習は個人的情報収集と同僚との情報交換など、個人及び校内レベルにとどまっていた。さらに、多くの体育教師が、短期的・実践的（即効的）・受動的・閉鎖的な研修を志向していることが明らかとなった。

第4章では、体育教師の保有する強い信念の形成過程と、日々の体育実践における信念の表出をエスノグラフィックな事例研究によって描出し、予期的社会化過程及び入職後の職場における信念の形成と維持に関わる経験を検討した。その結果、第一に、体育教師は幼少期のスポーツ経験から強い信念を形成していること、つまり、体育教師は入職時点で既に正当化された強固な信念を有していることを示唆した。第二に、入職後は、学校現場における切迫した問題認識から派生する信念が同僚間で共有されることにより信念が形成され、このことが却って教師個人による信念レベルでの省察を妨げていることを明らかにした。

第5章では、体育教師の授業に対する信念（授業観）の内実とその変容の様相を検討するため、内容分析による授業イメージの抽出とその変容の傾向を分析した。その結果、体育教師の授業観は、入職前の経験に由来する「態度・規律志向」「運動量・安全志向」から入職後経験に影響を受けて形成される「学習組織化志向」へと変容することが明らかとなり、同時に授業観の変容が入職前経験と入職後経験の相反的な影響関係の中で生じることを示した。

第6章では、入職後経験がどのような信念によって授業観の変容に結びつくのかを検討するため、仕事観及び教師イメージの構造と成長経験の受け入れに対する機能を分析検討した。その結果、「公共的価値の重視」「先導的実践の追究」等といった仕事観は経験の受け入れを促す一方で、「専門職的閉鎖性」「自律性の行使」はそれを阻害することが明らかとなった。この結果は、仕事観という信念が、新たな経験や知識を受容し改善・刷新へと向かわせる働きと、それらの知識・経験を排斥し固執へと向かわせる働きという2つの機能が含まれていることを示唆している。

第7章では、体育教師が一回り成長した経験とそこから得た教訓を抽出した上で、大学における長期研修に参加した教師の学びと経験の事例研究を実施した。その結果、信念の問い直しに深く関わる認識変容にとって、(学校現場に流通する実践的知識とは)異質な知識・情報に触れること、及び実践場面から距離を置いた非日常的な研修活動による「行為についての省察」が重要であることを明らかにした。また、長期研修においては、知識の生産プロセスに関わる学び方の学習経験と理論的・客観的知識に触れる経験およびこれらの経験を支える越境経験が、信念変容に対して重要であることを示した。

#### (考察)

第8章では、以上の実証研究の成果をふまえ、体育教師の信念の問い直しを促す「越境経験」の有効性と、それを必然化させる長期研修の可能性について考察した。大学における長期研修は自己決定型学習の特色を含んでいる。そこでは必然的に実践現場では経験しがたい「学び方の学習経験」と「理論的知識の学習経験」が同時的に生じる。そしてこうした越境経験からは、自らの信念を否定するような「非信念」が提示され、教師に葛藤やジレンマを引き起こす。このジレンマこそ「ダブル・ループ学習」や「変容的学習」といった高次の学習の契機とされるものである。大学における長期研修は、この越境経験が供給するジレンマを持続的・反復的に生じさせ、信念の問い直しから逃れることを許さない学習環境として機能する。このことは、研修に参加する教師に多大な精神的負担を課す反面、信念レベルの省察を強力に促す。また、長期研修による信念の問い直しは、当初「授業観」への省察からスタートするが、それは、「経験から学ぶ力」としての「仕事観」や「教師観」「研修観」などに波及し、信念体系の変容を総体的・漸進的に推進していくと考えられる。このように、信念の問い直しを促す越境経験は、「ゆらぐことのできる力」を向上させていく学びと捉えられることを示唆した。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本研究では、体育教師の成長を「信念の問い直し」という側面に焦点を当てて、分析・考察を試みたものである。これまでも体育教師研究において「信念」の重要性は指摘されてきたものの、信念の対象や内容については論者により様々であった。本研究では、信念を複数の構成要素からなる信念体系として捉えることで、信念の有する「行動的側面（行動への影響）」と「認識的側面（経験の解釈）」を総合的に考察することを可能とし、特に、仕事観（仕事に対する信念）が「経験から学ぶ力」であることを明らかにしたことは高く評価される。

また、本研究は、体育教師の信念レベルの省察と問い直しを伴うような学びと成長を促すためには、学校現場とは異なる場に身を置き、日常の授業実践に活用される実践的・技術的知識とは異質な理論的知識に触れ、さらに、自ら知を課題追求的に生み出す方法知を習得するような学びの経験の重要性を明らかにしたものであり、そうした越境学習を現職体育教師に提供する「大学における学び」の有効性を示すエビデンスを提示した点で高く評価された。

平成 27 年 1 月 29 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第 11 条を適用し免除とした。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。